

# フレイベル巡禮

倉 橋 惣 三

## ○第一信 (ブランケンブルヒにて)

ワイマールにゲーテ、シラー、リストの跡を訪ねて、絢爛たる獨逸文化を想ふた日の夕方、私は永い間の舊知をおとづれる様な心持ちで、ブランケンブルヒに來ました。

ブランケンブルヒは、チューリンギヤ東部の景勝、シュルワルツタールに近く、シュワッサーの流れに沿うた古驛です。夏のシーズンには山林を追ふ旅客の多く來る處らしいのですが、今は霜に凍りついた、静寂な寒村の趣きです。著いたのは夜の八時半、停車場の店の灯もない、がらんとして廣い路に、月が眞白に照らして居ました。「キングダーガルテンからお迎にしました。フレイベル先生はいづれ明日ゆつくりお目にかゝりますから、よろしくごいふお申しつけでした」チューリンギヤ風に頭から頬かむりでもした若い人が、斯ういひながら迎に出て居て呉

れたらなど、思つて見たりしました。(十二月十二日)

## ○第二信

けさは快よい晴天です。それだけに霜が一層白い。此の邊の霜は東京邊の霜と違つて、全く氷りついで居ます。路も野も雪の様に白く、ホテルの前の小川に沿うた枯木立は、幹も枝も玻璃細工の様に固く霜につままれて居ます。

先づ、フレイベルハウスを訪ねました。此處はフレイベルとは直接の關係のない、後の時代の設立ですが、フレイベルミュゼアムには澤山の貴重なフレイベル資料が集めてあります。それに、ベルリンのペスタロッツ、フレイベル、ハウスのドロシヤ女史から、先づこゝで、フレイベル巡歴のいろ／＼を聞いたがよからうごいふことを教へられて居ましたから、第一に訪ねる事にしました。

ミュゼアムの方には寫眞、手紙など、いづれも

興深いものの中に「人間教育」や「母と子の遊び」の初版、それから、フレイベルの用ゐた古い恩物などは、最もなつかしいものゝ一つでした。こゝに幼稚園が附設してあります。私は急いでフレイベルの最初の幼稚園を見にゆき度いと思ひながら、此幼稚園の子供達のお相手で大分時間をとられて仕舞ひました。

フレイベル最初の幼稚園は、ブランケンブルヒの古い町を中心、マルクトプラッツに近い小路の奥の坂の下の様などころにあります。所謂「納屋の上の家」で下は納屋の入口になつて居る上の一室です。今は學校に使はれて、中を壁でしきつて二つの小さい教室になつて居ります。私はこの小さい古い、質素な室の中でいろいろのことを想ひました。フレイベルがその自發活動主義の教育を初めて幼児に適用した時の心持ちなども想ひました。こゝこそ今日、世界に擴がつて更に益々盛にならうとする、幼児教育の發祥地です。

午後は馬車でオーベルワイズバッハに行きました。シュワルツタールを経て二時間半程のところ、全くの山の上の小村です。村の中心の廣場になつた處に、高い教會堂があつて、その向ひの家がフレイ

ベルの誕生の家です。今も昔の通り牧師館になつて居て、フレイベルの父以來代々の牧師さんの住宅です。今の牧師さんのキルステン氏は、純撲な濃厚な人で私を迎へ入れて、懇にフレイベルの話をし、手紙その他の資料を見せて呉れました。此の家の後ろは墓地になつて山つゞきです。私はフレイベルの自傳で讀んだ彼れの幼時の事をさまざまに描いて見ました。フレイベルはほんとうの田舎子です。

歸りは夕日から月になりました。溪流は厚く凍つて居ます。毛布に膝をつゞみ、外套の襟を立てゝも耳は切れる様に冷い。人通もない谷の底の森の中を、馬は白い氣息を立てゝ走りました。(十二月十三日)

### ○第三信

(ブランケンブルヒにて)

きのふ、フレイベルミュゼウムで、私は大それた野心を起しました。それは、フレイベル當時の恩物を一箱分譲して貰ふといふのです。私は色々古い恩物を見てゐる中に、一種類重複したものゝあるのを見つけて、それを買ひ受けることは出来まいかと問ふて見たのです。六かしい話とは思ひながら、またとない機會、遠慮しながら言ひ出して見ました。そ

れは、お氣の毒ですが出來ないことでせうといふ返答です。私は、その恩物の古い箱を、手離しがてに見てみました。しかし、と案内の人は言葉をつぎました。しかし、私の一存では何とも御返事出來ません、こゝにもう一日滞在して居て下されば相談して見ませう。そして、此の「母子の遊び」もいつしよに相談して見ませうといふのです。これは、私が、さつき、「母と子の遊び」の初版の三冊あるのを、さもほしそくに繰り返し〜見て居た、その心持を讀んで呉れたのでした。

私は、今朝、とてもとは思ひながら、もう一度ミユゼアムを訪ねて見ました。果して、恩物の方は譲り難いといふのです。しかし、「母と子の遊び」は一冊は此のミユゼアムに初めからあるもの、一冊は、寄贈者の名のあるもの、それはどうすることも出來ないが、もう一冊の方は、餘りたつてのお望みだから、といふのです。私は飛び立つ様の思ひで、譲つて貰ひました。豫て所蔵して居る新版のと餘り違つた處はありませんが、フレール自身に印刷させた初版といふのが、私には、限りなくなつかしいのです。私は此本を持つたまゝ停車場の附近の橋の袂に

あるフレールベルの昔の住宅と林の中にある記念碑とを見て歸りました。

此の大きな獲ものをした午後、私はカイルハウへ行きました。きのふと同じ馬車の馭者君、もう一廉の教育研究者らしく、且那カイルハウのアンスタルトは立派ですよなどいふのも一興です。ブランケンブルヒの後の山を越えて一時間餘かゝります。此の峠のあたり、フレールベルが初めて「キンダーガルテン」の名を得た處かと、あてもなく思つたりして見ました。

カイルハウは思つたよりも更に小さい山あひの村でした。人口、二百、戸數八十といふことです。峠を下りて、目の下に此の村を見た時は、ほんたうに掌に入る様な小さな村でした。こゝにあるエルチーウングス、アンスタルト(兒童の教育所)はフレールベル以來つゞいて居るものです。所長の、ウエヒター氏は、懇に私を迎へて、いろいろの間に答へて呉れました。同氏の奥さんが、バロップの血つゞきといふのもなつかしいことです。こゝでフレールベルは人間教育」を書きました。彼の教育思想の爛熟した時といつていゝのです。ランゲタールも、ミッテンド

ルフも、バロップもここに居ました。アンスタルトの廣い食堂は、此の三人の結婚式を擧げた處です。折柄、クリスマス前の飾りのしてあるのも、私の心には格別のうれしきでした。

フレーベルの藏書、當時の子供達の製作品といふ様のもので澤山あります。「人間教育」の初版も數冊ありました。既に「母と子の遊び」の「初版」を獲た。私は、これがどうかして手に入れられないものかと、きりのない慾を起して見たのでした。

ウエヒター氏はどうも、それ程お望みならばお分してもよいが、實は非常に高價になつてゐるので、すといふのです。價をいつて居る場合ではありませぬ。私は、此の紙の古い表紙のすゝけた一冊の本を抱きかゝへる様にして、その圖書室を出しました。

アンスタルトの窓から、キルシュ山が見えます。

ここには、ミッテンドルフ、ランゲタール、バロップ、その他、此のアンスタルトの昔からの先生方の墓があります。私は日の出のうすあかりを辿つて、其の墓地に詣でました。祝福すべき人々よ。身を獻げて、フレーベルを助けて呉れた人々の名に、永久の祝福あれ。(十二月十四日)

#### ○第四信 (アイゼナハにて)

「人間教育」の初版と、「母と子の遊び」初版と、それにフレーベルハウス出版の數書とで、小さい一包の荷物が出來ました、けふも、亦、眞白な霜の朝を、私は大事なその荷物を持つて、ブランケンブルヒを立ちました。

汽車一時間餘、スタットイルムの小さい停車場に著きました。私はここで、フレーベルが子供の時居た叔父さんの家と、子供姿で通つた學校とを見、更にグリースハイム迄行つて、フレーベルが兄さんの子を教へた、彼れの教育生涯の最初の家を見度いと思ふのです。

停車場の人に一寸訊いて見ると、グリースハイムの家の方は直ぐ分りましたが、スタットイルムの方はまるつきり見當が付きません。私は兎に角、村で一番古いホテルへ行つて見ました。私のついた食卓には、さつきから百姓らしい人が一人食事して居ました。私は此の人と、ホテルの主人とを相手にフレーベルのことを聞きました。矢張り、グリースハイムのことしか分りません。私はそれでは學校へ行つ

て見やうと言ひますと、ホテルの主人がそれよりも教會の先生の處の方がいゝ、昔のことは何でも御承知だからといふのです。私は此の時、ふと、フレーベルの叔父さんのホフマンも教會の牧師さんだつたことを思ひました。主人は、わざわざ、私を案内して、牧師館につれて行つて呉れました。

老牧師ダニエル氏は、私を書齋に導いて、きのふ丁度、日本のことを書いた本を読みましたよ、といつた風に打ち解けて呉れました。私が來意を、フレーベル巡禮に、チューリングヤを歩いて居るが、こゝだけは見當がつかないで困つてゐますといふと、此の家ですよ、ホフマンの住つて居たのは、此の家ですよ、といふのです。それから、此處は書齋ですから、子供のフレーベルは餘り來なかつたでせう。下の居間の方が幼いフレーベルの遊んだところでせう、といつて家中を案内して見せて呉れました。私は思ひがけないことに、人の家とも思はず、そこらのぞき廻りました。老牧師は私を玄關まで送つて、庭の方も御覽なさい。フレーベルが馳け廻つて遊んだのでせうよと、笑ひながら荒れた庭を指して見せました。フレーベルの通つた學校は、確には分りま

せんでした。しかし、あの自傳にある教會學校の位置は、大體此邊だらうと見當をつけて見ることが出来ました。

グリースハイムはスタットイルムから馬車で半時間程の小さい農村です。其の村の入口に近いところの家に、壁に大きな標札をかゞげて「フリードリヒフレーベル、此處に、獨逸教育の彼れの事業を初む。」と記してあります。此の家も、フレーベルの兄さん以來引きつゞき牧師館になつて居て、白髯のヘムレール氏は、今、小さい圖書室になつて居る室が、フレーベルが子供を教へた處だと教へて呉れました。そして、此の村はづれの、フォルスターハウスにも住んで居たことがあるから行つて御覽なさいと、いつて呉れました。私は直ぐ、そこへ行つて見ました。全く畑に近い古い百姓家です。可愛い五つ許りの孫を連れたおばあさんに、ここにフレーベルが居たのですかと聞いて見ますと、知りませんよ。牧師さんが、そう言はれましたか、私は頓と知りませんでと、けいんな顔をして居ました。そして、私が寫真をとつて居る間に私のつれて來た馬車の馭者に、此の人は、なんでこんな處を見に來なかつたのかね

と聞いて居ました。馭者の爺さんの答が面白いのです。古いものが好きと見えるね、ですと。

若いフレibelは此の家の一室でも借りて兄さんの家と、兩方に住つて居たものと見えます。若い半生の漂浪から、初めて教育に自分の天職を見出した、若いフレibelはこゝに居たのです。

再び、スタットイルムへ歸つて、夕方の汽車で、アイゼナハ迄來ました。リーベンスタインまで行き度いのですが、汽車の都合で、こゝに泊ることにしました。此處ではフレibelは別段の仕事もして居ませんが、幾度か通過し、また知人の家に泊つて居たこともあります。あの漂浪の生活中、落ちつかない心を抱いて、フランクフルト、アム、マインへ職を求めに行つて、圖らず教育といふものゝ興味に接した、彼れにとつては大切な旅にも、此の町を通つたのでした。

ホテルの明い手紙室で、私は此の通信を書きながら、當時の、若いフレibelのことが目に浮いて來ます。(十二月十五日)

## ○第五信

(アイゼナハにて)

アイゼナハは西部チューリンギヤ探勝の中心です。チューリンギヤ森林地帯の自然美を説くものは、多く此のアイゼナハ附近を以て第一に推します。更に歴史的にはマルチン、ルーターの町として近世史の第一頁を飾る土地です。ルーターが心血をそゝいで聖書翻譯の大事業を行ふた彼の有名なワルツブルヒの城も、こゝにあります。私は此の世界史の最大遺跡の一つに對して、絶大の尊敬を拂はずに居られません。しかし、それは此の通信のほかに屬しません。フレibel巡禮者として、先づリーベンスタインに急がなければなりません。

アイゼナハからマイニンゲン行き汽車に乗つて、インナルポーンで乗り換へると、數驛にして、マリエンタールに來ます。その次が此の線の終點で右リーベンスタイン、左シュワイナ、兩方の村の名を冠せられて居る小さい停車場です。私は此處へ來て、フレibel傳でいつもどうも、はつきりしなかつた、リーベンスタイン、シュワイナ、マリエンタールの地理的關係が始めて、よく分りました。

私は先づ、シュワイナの方へ降りて行きました。

昔からの工場地で、村そのものは別段風趣のある處

でもありません。私はその幼稚園を訪ねて見ました。之れは豫期して居なかつたところですが、リーベンスタイン、シュワイナ、マリエンタールを通じて今はたゞ此の一つの幼稚園があるのみといふことを路人から聞いて、先づ訪ねて見たのです。

此の幼稚園は村の學校の下の室を用ひて居る。フレーベル時代とは關係のないものでした。この或る大きな工場主であつた某男爵夫人によつて設立されたもので、いはゞ一種の工場幼稚園でした。しかし。此のフレーベルのシュワイナの幼稚園、しかも今はたゞ一つの幼稚園といふのが、私には、棄て難い興味をひきました。先生はいろ／＼幼兒の製作品などを見せて呉れながら、どうも經費が足りないで困る。町の人達が幼稚園といふものを、ほんどうに理解して呉れないで困る、といふ様なことを話して居ました。私はそうではない。今の獨逸は何處にも經費に困つてゐる爲めだと思ひました。私はフレーベルのお墓へ獻げる代りにと思つて、心ばかりの贈りものを、その子供等にして置きました。

私の見つけた馬車屋さんは、私のフレーベル巡禮の心持ちをよくも理解して呉れて、短い間に充分案

内して呉れました。十年前にこゝでフレーベル祭があつて、英、佛、米諸國のお客さんが澤山集つた時、その時も私が御案内しましたなど言つて居ました。

私はその時の記事をアメリカのキンダーガルテンレビューで讀んで、いつか自分も行つて見たいと思つたりしたことあつたのを思ひ出しました、其の時の記事にもあつた、フレーベルの直きの教へ子だつた人が、今も二人か此村に残つて居るそうですが、九十近い老病とかいふので、會はずに來ました。こんな譯で馬車屋さんは、いろ／＼よく案内して呉れました。フレーベルのお墓へゆく時など、十歳になるといふ可愛い娘を私の馬車に同乗させて、墓碑を案内させて呉れました。墓はシュワイナの山沿ひの墓地にあります。恩物の球と、立方體とを重ねた形の石の、紀念碑が建てゝあります。前には紙製の白菊の花などもありました。私が可なり暫らくの間、其の墓碑銘を讀んだり、石を撫したり、霜に凍る落葉を拾つたりして居る間、その馬車屋さんの娘は靜に立つて待つて居て呉れました。私は私のせめても心の心に小さい名刺をさゝげて歸りました。あとで其の娘に、フレーベルといふ人は、どういふ人か知つ

て居るかど聞いて見ましたら、えらい子供キョゴコロイの友達です、と答へました。よくえらい教育者だといつて呉れなかつた。よく先生だといつて呉れなかつた。よく子供の友達といつて呉れた、私は餘りの嬉しさに、赤い毛糸の帽子の上から、ブロンズの軟い髪をなで、やりました。

そこからマリエンタールへは小半路の近い處です。そこにマイニンゲン侯から貸し與へられたフレールベルの最後の家があります。之は相當立派な邸宅で、四圍のつくりも威嚴を持つたおやしき風です。私は此の家に於けるフレールベル晩年の思ひ出を一々こゝに記す暇を持ちません。フレールベルの名が世に知られて、多くの尊敬者の集つたのも此處です。熱心な若い人達がこゝに集つて、フレールベルの教育を受けたのも此處です。フレールベルの幼稚園運動史にとつて第一人者たるマレンホルツ、フォン、ピュウロウ夫人のフレールベルを識つたのも此處です。プロシヤの文部大臣によつて、つまらぬ誤解から、幼稚園禁令を出されたのも此の時です。此の大きな迫害と、それによつて益々強くなつた同情者の群との間に、花と、人と、子供と、神と、然りあらゆるものを

を愛すといひながら、我が老フレールベルの永き眠りに就いたのも此處です。

私は胸をおさへてその家の前を去りました。

路は小高くなつて、深い森林に入ります。その森林の一端に、墓地にあつたと同じ形の石の記念碑があります。こゝこそフレールベルが幼児達をつれて來ては遊んだところでした。「馬鹿ちいさん」のあだ名に村の人から(好意的に)呼ばれた程、毎日、己れを忘れて子供と遊んだところでした。私は、その森の中に立ち、森の外に立ち、遠く離れて森を見、近く寄つて落葉に据し、踊り上り度い様な、大きな聲で叫び度い様な、何とも形状し難い一種の狂喜を感じない譯にゆきませんでした。

森の幼稚園です。戶外保育です。自然幼稚園です。フレールベルの幼稚園を恩物だけに考へる人々に、一と目見せ度いのは此の丘の上の森です。私は春の日を想像して見ました、夏の日を想像して見ました。秋の日を想像して見ました、此處に青草の萌ゆる時を、こゝに小鳥の囀づる時を、こゝに木の實の落つる時を。而して、子供達の笑ふ晴やかな聲と、自由に走り廻る爽かな運動と、其の間に交り遊ぶ、保育

實習所の若い女生徒達と、それを、にこ／＼楽しさうに見てゐる、あの髪の毛長いフレールベルと、その上を高く被ふ此のチューリンギヤの清透な蒼空を想像して見ました。

私は、こゝでフレールベル巡禮記の筆を措きませう。幸福なる巡禮者は、こゝに宮殿なき宮殿を見出して、宮殿より大きな野と森とを見出して、巡禮最後の心からの喜悅に充たされて居るのです。(十二月十六日)

(附記) 私は此のチューリンギヤに、まだ幾日でも居たい心がします。しかし、急しい旅の間に、その餘裕ありません。それに、伊太利の方の旅に出る豫定の日も、だん／＼近づいて來ます。明日、ルーテルの遺跡を訪ふた後、ライプチヒを経て、一旦ベルリンに歸らうと思ひます。此の通信も急しい間の手紙だよりで印象の十分の一も記すことが出來ません。何づれ歸つてから、ゆつくりお話する機會もあらうと思ひますし、そこゝで撮つた下手な寫眞も其の時お目にかけて度いと思ひます。たゞ、弱い冬の日で、

どれだけ、うまく撮れたかと、頗るあぶな  
かしく思つて居ます。

○編輯室より

倉橋主幹を横濱埠頭に見送つたのは、みぞれ降る大正八年十二月十三日でした。あれからもう二年餘も経ちました。過ぎてみれば短いですがお留守番するものにとつて、殊に初めの一年間は本當に長く思はれました。しかし、大戦後の世界を一巡なさる先生にとつては、この二年間も束の間であられたこと、思はれます。

今や先生をのせた熱田丸は日本へ日本へと走つてゐます。御出發の時にもました御元氣な姿を迎へる日も愈々近づきました。

○  
本會のため非常に御盡力下さつた湯原元一先生は、今回東京高等學校長に御轉任となり校務御多端のため、會長の職を辭され、本會は新任東京女子高等師範學校長茨木清次郎先生を會長にいたゞくと、なりました。前會長によつて著しく發展の機運にむかつた會の諸事業は、新會長の御就任とともに愈々その歩を進むること、存じます。